

黄宗羲の文学観

福 本 雅 一

一
明末、内憂外患交ごも至る時に、為政者の無能と、政治の腐敗は、その極に達し、奄党と東林党の確執抗争は、国家の滅亡に拍車を加えた。

黄宗羲は、万曆三十八年（一六一〇）に生れ、康熙三十四年（一六九五）八十六歳で歿した、明の滅亡（一六四四）を、その壮年期に挿んで、波瀾を極めた十七世紀の約九十年が彼の時代にあたる。

宗羲は、浙江余姚の人、字は太冲、梨洲と号し、東林党の名士として知られる、黄尊素の長子である。

尊素については、錢謙益の山東道監察御史贈太僕寺卿黄公墓誌銘（注一）に詳しい。

宗羲の生涯については、比較的よく知られているので、ここでは、必要な最低限を、三時期に分けて述べたい。

第一期、宗羲が十七歳の時、父尊素が惨殺された、崇禎帝が即位し、魏忠賢一派を肅清した時、彼は直ちに上京し

て、父の冤を雪いだ。

その後、父の遺言に従って、郷里の大儒であり、陽明学の正統を以て任ずる、劉宗周に学ぶと共に、明末詩文の大結社である復社に加わり、沈寿民、顧杲、陳・冒・方・侯の四公子等と交って、豪奢浮艶の生活を送った。南都防乱掲を以て、阮大鍼の罪を鳴らしたのも、この時である。前後して、江浩・張岐然等と、武林に読書社を起し、また、彼が、学問の形成に於いて、最も深い影響を受けた二人、陸符、万泰（万氏兄弟の父）に兄事した。

第二期、明亡び、南京に弘光帝が即位すると、馬士英に附して、勢を得た阮大鍼は、前年の報復を謀り、東林復社の人士を一網にせんとした、宗羲は辛うじて免れ、清の南侵によって、この危機は去ったが、続いて起った江南一帯の抗清運動の渦中に捲きこまれた彼は、浙東に帰るや、同志を糾合して、精忠堂と号する義師を具して、魯王監國の軍に従った。戦い利あらず、敗れて四明山に入り、間もなく、魯王が舟山に在るを聞いて、之に赴いた。しかし、こ

の抵抗も、熊汝霖、錢肅業等の死によって次第に振わず、宗羲も、難の母に及ぶのを恐れて、遂にここを去った。そののち、明朝回復の望みも全く絶えたので、母を奉じて故郷へ帰った。

第三期、五十を過ぎる頃から、漸く学問と著述に専心し、各地より、その盛名を聞いて、従学を請う者が次第に多くなった、屢しば徵辟されたが、みな辞して就かず、明の遺臣としての節を全うした。

彼が、顧炎武、王夫之と共に、三大儒と称され、清朝考証学の基礎を築いたことは、周知の事であるが、これらの人たちに共通した、切実な学問は、鼎革の際に経験した幾多の艱苦の中に、鍛えられ、そして生れたものであった。

宗羲は、その師劉宗周を始め、多くの先輩知己が、困難に殉じたにも拘らず、自身は、その生を保ち得たことについて、如何に悔悟していたかは、

「余身を屈して母を養い、妾妾として自から晋の処士に附す、未だ後の人其の我れを許すや否やを知らざるなり。」(注二)

と述べていることから、窺い得るであろう。

宗羲が、多くの著書によって、天下後世に益ある贈物を遺したことは、そうすることのみが、幸いにも生命を全うした、自己に課せられた使命であると、強く意識していたことによる。

二

宗羲は、明詩を三つに分けて、次のように論じている。

「詩は凡そ三変せり、北地歴下の唐有り、声調を以て鼓吹を為す、公安竟陵の唐有り、浅率幽深を以て祕笈と為す、虞山の唐有り、排比を以て波瀾を為す。」(注一)

各おのその特長を説き、また、

「天下の精神をして之を一途に聚めんと欲す、是れ詐僞をして百出せしめ、止だ其の膚受を留むるのみ。」(注二)と続けて、これらの主張の欠陥が、排他的な劃一主義にあったことを看破し、自己の真情に忠実な、個性的な詩こそ、尚ぶべきであると述べた。

明末、墮落の極に達していた擬古派の詩文に対して、改革の烽火をあげたのは、公安の三袁である、次いで、幽深孤峭を標榜して、竟陵に、鍾惺・譚元春が起った。

これらの人びとが、七子の弊風を改めた功績は、文学史上にも、高く評価されているが、更に堂堂の論陣を張って之に決定的な打撃を与えたのは、常熟即ち虞山の錢謙益であった。

「夫れ竟陵公安、豈に能く自から別に家を為さんや、竟陵は王孟を学びて之を失う者なり、公安は元白を学びて之を失う者なり、根孤にして枝薄し、流注の害に過ぎざるのみ。」(注三)

と、宗羲が説く如く、擬古派を打倒したものの、自らの主張に、それ程の論理と見識を有しなかった公安竟陵が、間

注一 初学集卷五十 贈太僕寺鄉黃公墓誌銘

注二 南雷文定後集卷二 兵部左侍郎蒼水張公墓誌銘

もなく、自壞作用によつて消滅したのは、自然のなりゆきであつた。

この時、その博学と能文を以て、明末の詩文を一振したのが錢謙益である、彼は云う。

「夫れ本朝文無きに非ざるなり、詩無きに非ざるなり、本朝自から本朝の文有り、今其の漢に似て非なる者を取つて本朝の文と為す、本朝自から本朝の詩有り、今其の唐に似て非なる者を取つて本朝の詩と為す、人尽く其の心思を蔽錮し、其の耳目を廢黜す、唯だ繆学を是れ師とし、前人に在つては猶お漢唐の衣冠に倣い、今人に在つては遂に李王を奉じて宗祖と為す、譌を承け偽を踵ぎ、底止を知る莫し。」(注四)

當時の擬古派の附和雷同と模擬剽竊とを、非難した後、また云う、

「真なれば則ち朝日夕月、偽なれば則ち朝華夕槿なり、真なるは則ち精金美玉、偽なるは則ち瓦礫糞土なり。」

(注五)

詩文の真偽を論じて淡・質・簡・平・変の五要素が、適度のバランスを保っている状態を、その理想と考えた。また格調よりも内容を主とせよ、という有詩無詩の論を立て、王世貞を斥けて、帰有光の頭影に努めたことは有名である。

宗羲は、父子二代に亘つて、錢謙益と親しく、思旧録には、

「余数しば常熟に至る、初め弘水山荘に在り、繼いで半野堂絳雲楼下に在り、絳雲楼の蔵書、余の見んと欲する

所の者有らざる無し、公、余と老年読書の伴侶と為らんと約す。」(注六)

と記されていることから、彼が謙益と接することに、多大の影響を受けたであらうことは、容易に推察される。

錢謙益は、明末清初の詩文壇に君臨すること五十年、當時に於いて、最も大きい発言力と影響力をもった存在であつた。古文辞派が有力な中心と結束を欠いていた時、謙益の議論は、アンチテーゼも提起されぬままに、彼の圧勝として一応終止符が打たれた。この時、謙益の羽翼を為したのが、江西に予章社を起した艾南英である。

宗羲は、復社に遊んだ頃から、南英に対する関心は極めて大きく、若年の詩集に、彼の序を冠していること等からも、或る時期、南英にも相当の傾倒を示したのではないかと想像される。南雷集中、謙益に次いで屢しば言及されるのは、南英である。

南英の所説を、重刻羅文肅公集序によつて窺おう。

「有明の文章の盛んなる、太祖の朝より盛んなるは莫し……弘治の世、邪説始めて興る、天下の士に勸めて、唐以後の書を読むこと無からしむるに至る、又た曰く、三代兩漢の書に非ざれば読まず、驕心盛氣、復た韓歐大家の立言の旨を考えず、又た持する所既に狭く、中実学無きを以て、相率いて司馬遷班固を取り、其の句字を摘し、分門纂類し、因つて仍お附和す、太倉歴下の両生、北地の説を持して又た之に過ぐ、之を持すること愈いよ堅く、流弊愈いよ広し、後生相い習いて腐勦を為し、今

に至るも未だ已まず。」(注七)

一読して、錢謙益の説を敷衍したものであることが、理解されるであらう。

後になって、錢艾二家と異なる、宗羲自身の色彩は、次第に鮮明となり、それにつれて、この二者に対する彼の評価も、非常に厳しいものとなってくるのであるが、それはともかく、宗羲が、錢謙益一派の議論を基礎として出発していることは後にも触れる。宗羲が、後世に遺す目的で、明一代の文を選んだ、明文案、明文海、と、更にそれらの精粹を抽いたと称せられる、明文授読によって彼の明文学に対する評価と共に、彼の文学観を求めたい。

今、明文授読について論ずれば(注八)、六十二巻に収める作家凡そ三百、篇数凡そ七百八十という相当大部なものであるが、その中で、二十篇以上採られているのは、方孝孺、錢謙益の二十四篇を首とし、宋濂二十一、唐順之十九、王慎中十七、王守仁、帰有光、艾南英十一、黄尊素十の計九名である。

この選択の特色は、次の三点に要約されよう。

一、経世治用の文を多く採ること、方宋王はさておき、宰相の位にあった、趙貞吉、張居正、沈一貫等と、東林党の趙南星、顧憲成等を、文学上よりも寧ろ歴史上の顧慮より録すること。

二、郷里の先輩、知己を多く収めること、彼の父尊素十篇、弟宗会二篇を採り、その師劉宗周、閩浙の忠臣、黄道周、倪元璐や、また知友陸符、陳確、沈寿民にも可成りのス

ペースを割いている。

三、自己と傾向、主張を同じくする、帰有光、錢謙益、艾南英を録することの多いのに比し、擬古派の作は、殆んど黙殺していること、李夢陽三篇、王世貞二篇、李攀竜一篇と洵に寥寥たるものである。

これによって気付くのは、これらの特徴が、詩と文との相違はあれ、錢謙益が列朝詩集を選ぶに用いた規準と、全く同じであるということである。

謙益が列朝詩集を編纂した動機は、元好問の中州集に倣って、明詩の精華を抜くと共に、詩によって歴史を補い、忘れられ、まさに埋もれんとする人物を、後世に遺さんとするためであった(注九)。宗羲は、謙益が詩に於いて果たした役割を、文に於いて継いだのである。

宗羲が、国初の宋濂、方孝孺に続いて、楊士奇、李東陽を正統の座にすえ、繼いで、王慎中、唐順之、帰有光に揺がぬ評価を与えたのは、概ね錢艾二家の所説を承けており、「大復習気最も寡り、惜しいかな、未だ其の学を竟えざるや。」(注十)

と、前後七子のうちで、何景明にだけは、例外的な好意を寄せているのも、謙益と一致する。(注十一)

宗羲が、その三種の明文選について、公正な選択に努めたことは、信頼し得ると思うが、次の事実も附記して、彼の態度にも、或る矛盾と曖昧さを含むことを指摘しておくたい。

それは、陳子竜と艾南英に対する、彼の偏った取捨であ

る。陳子竜は、宗羲の郷里に近い紹興府の司法官となつたことがあり、その折、彼の父尊素の碑銘を撰した縁などによつて、互いに親交を結んだことは、思旧録にも見えるが、当時有名な話柄であつた、子竜と南英の論争については、

「海内の文章家、千子を右とせざる無し。」(注十二)と、南英を支持しつつも、子竜に対しては、

「臥子の晩年、亦た平淡に趨き、未だ必らずしも千子の及ぶ所と為らず。」(注十三)

と述べて、寧ろ南英よりも、高く評価しているのである。それにも拘らず、明文授読に於いては、南英の十一篇、(その中には、子竜ら幾社の主張を駁して書かれた、答陳人中論文書、答夏彝仲論文書を含む。)に反して、子竜の文は一篇も採られていない。

また、南英の推挙した羅垺に対しては、七篇の多くを録する等、この編輯についての疑問も少くない。

しかし、授読に附された批評や、明文案序上下その他に述べられた、宗羲の明文学に対する見解は、錢謙益の列朝詩集が、好悪の感情に累わされて、公正な批判を欠いている場合が少くないのに反して、現在から見ても、ほぼ完全なパースペクティヴを示しており、その卓見と妥当性は、彼が文学評論に関しても、一流の人物であつたことを、はっきり証明している。

それでは、文学の内容に対して、彼が最も価値を認めたものは何であろうか、明文案序上に於いて、

「今古の情尽くる無し、而して一人の情、至る有り至らざる有り、凡そ情の至る者、其の文末に至らざる者有らざるなり、則ち天地の間、街談巷語、邪許呻吟、一として文に非ざる無く、而して遊女田夫、波臣戍客、一として文人に非ざる無きなり。」(注十四)

と述べているのは、宗羲の文学觀を要約したものであるが、これは、苟しくも真情より発したものであれば、それが何であれ、すべて文であり、何人によるものであれ、彼等は文人であると規定する。

錢謙益は、文は氣を以て主と為す、という曹丕論の語を引いて、形式に拘泥せぬ、達意主義を標榜したのであるが(注十五)、宗羲は之に立脚しつつ、更に、情の真に至る、を強調する。

「情なる者は、以て金石を貫く可く、鬼神を動かすべし、古の人情、……一として真意の流通に非ざるは無し、故に溢言曼辭の以て章句に入る無く、詔笑柔色の以て応酬に資する無し。」(注十六)

と言う如く、あくまで真情の発露を尊び、余分な修飾、無用な表現を拒否しているのである。しかし、この至情ということは、いわば、文学に対する彼の不可欠な、最低の要求であつて、当然次のことを読書人には希望しているのである。

「読書は当に六経従りすべし、而して後に史漢、而して後に韓歐諸大家、浸灌すること之れ久うす、是に由つて発して詩文を為らば、始めて正路為り、是を舍ててせば

則ち旁蹊曲徑なり。」(注十七)

眞の詩文は、經書に根底を置き、多くの読書の結果得られた、精確な判断と正当な評価に値いするものでなければならぬ。また、

「蓋し多く読書すれば、則ち詩は工なるを期せずして自から工なり、若し詩を学ぶに其の工を求むるを以てせば、則ち必ず得可からず、經史百家を読めば、則ち一詩を見ずと雖も、詩は其の中に在り。」(注十八)

これは、李何崛起以後の、詩壇の通弊であった、無学な詩人の模擬剽竊を非難したものである。無学のもたらした悲喜劇は、枚挙に暇ない程であるが、宗羲は、その元凶として、李何李王を挙げて、

「歴下太倉相繼いで起り、遂に天下の詩を為る者をして、名づけて唐を宗と為さしむ、実は何に諦し李に郊するなり、李を祖とし王を宗とするなり、然らば学問の稍や原本ある者、亦た之を厭わざるは莫し。」(注十九)と攻撃しているが、しかし七子の亜流に流しては、一段と厳しい。

「北地太倉を攻むる者、亦た曾って北地太倉の学問有る乎、竟陵公安を攻むる者、亦た曾って竟陵公安の才情有る乎。」(注二十)

唐以後の書は読まず、故事も用いないというのが、擬古派の主張の重要な一つであったから、前代の藉りものであった、彼等の発想や表現は、必然的に現実性に乏しく、切実性にも欠けたものとなった。そしてその亜流に至っては、

如何に唾棄すべき愚劣さに満ちたものであったかは、言うを俟たないであろう。

古来、中国に於いては、価値の混乱が起ると、常に經書にたちかえつて、道徳や文化の根源を、再び之より演繹しようとする努力が、繰返しなされてきた。前後七子が、偏狭な教養と読書を以て詩文を壟断するや、まず錢謙益が、博大な学識を以て、彼等の無学を痛撃し、次いで宗羲が、經書に依拠せる正統論を以て、彼等を完全に粉碎し去つたのである。

こうして宗羲は、厳しい儒教の伝統を再認識することによって、明末文化の頽唐を救わんとした。このような態度は、詩文に一種の遊戯や開放を期待している人たちと、明かに區別されることを要求する。

宗羲は、錢謙益に対する批判に於いて、これに触れつつ、彼の欠点を、次のように指摘する。

「闊大なること震川に過ぐるも、情に入る能わざる一なり、六經の語を用いて、經を窮むる能わざる、二なり、喜んで鬼神方外を談じ、事実非ざる、三なり、用うる所の詞華、每每重出し、華を謝し秀を啓く能わざる、四なり。」(注二十一)

また、艾南英に対しては、

「艾千子雅に震川を慕う、是に於いて其の文を取り、之を規し之を矩す、昔の王李を慕倣せる者を以て、震川を摹倣す、蓋し千子の經術に於ける甚だ疎なり、其の所謂經術は、蒙存淺達、乃ち挙子の經術にして、学者の經術

に非ざるなり。」(注二十二)

「歐陽を摹倣するも、其の生呑活剝、亦た猶お史漢を摹倣するの習気なり、其の理学に于ける、未だ嘗って深湛の思有らず、而して時文の見解を墨守し、先儒を批駁し、後生小子を引く、不学にして狂妄、其の罪や大なり。」(注二十三)

「千子、時文を以て不朽の具と爲し、震いて之を矜る、有識者の笑う所と爲る」(注二十四)

列挙した多くの批判は、それらが、自己の陣営に属する両將に放たれたものであるだけに、宗羲自身の深い考察と、苦い反省がこめられているものと見てよからう。しかし、宗羲も、後人全祖望より、

「先生余議を免れざる者二有り、其の一は則ち党人の習気未だ尽きず、蓋し少年即いて社会に入り、門戸の見、深く入りて粹かに去る可からず、其の二は則ち文人の習気未だ尽きず、正誼明道の余技を以て、猶お留めて枝葉有り。」(注二十五)

と批判されているのは、蓋し、宗羲の限界を示すものであらう。何故なら、顧炎武と共に、彼ほど意識して党人文人の習気を排しようとした者は、殆んどなかった筈であるから。

注一 南雷文定後集卷一、斬熊封詩序

注二 同右

注三 南雷文定後集卷一、寒邨詩稿序

注四 初学集卷七十九、答唐訓導汝諤論文書

注五 有学集卷三十九、復李叔則書

注六 思旧録、錢謙益

注七 天慵子全集卷四 羅文爾序

注八 私が見ることができたのは、明文授読に過ぎない、明文海については、目録によつて、全体の体裁を想像する以外になかった。四庫全書総目提要には、明文海四百八十二卷、分類殊に繁碎を爲す、又頗る錯互倫せず、編次糺雜、後人の譏る所と爲る、と評したのち、閻若璩の潜丘劄記を引いて、恐らくは、宗羲の子黄百家の手に成るものであらう、と述べている。明文案二百七卷については、謝國楨の梨洲学譜によれば、北京図書館蔵鈔本と記されているのみである。明文授読——即ちその子百家に、明文の精華に通曉させる期待のもとに名づけられた——も、本文で論ずるような矛盾や欠陥が多い。要するに、これら三種の明文選を、明儒学案と比較した時、著しい遜色が認められるのは、否定しえないところであらう。

注九 錢謙益が中州集に倣つて列朝詩集を撰したことは、南雷文案卷一、姚江逸詩序の中に見える。

注十 南雷文案卷一、明文案序下、宗羲の明文学に対する見解は明文案序上下に詳しい。

注十一 列朝詩集丙集、何副使景明

注十二 思旧録、陳子竜

注十三 同右

注十四 南雷文案卷一、明文案序上

注十五 有学集卷十九、周孝逸文竄序

注十六 南雷文案卷二、黄学先詩序

注十七 南雷文案卷七、高旦中墓誌銘

注十八 南雷詩曆題辭

注十九 南雷文定後集卷一、姜山啓彭山詩稿序

注二十 南雷文定三集卷一、范道原詩序

注二十一 思旧録、錢謙益

注二十二 南雷文定三集卷一、鄭禹梅刻稿序

注二十三 明文授讀卷七、艾南英論宋禘禘附記

注二十四 南雷文案外集、仇公路先生八十寿序

注二十五 結埼亭集外編卷四十四、答諸生南雷學術帖子

三

黄宗羲は、明夷待訪録に、

「時人の文集、古文は師法有るに非ず、語録は心得あるに非ず、奏議は実用に裨無く、序事は史学を補う者無きは、伝刻を許さず、其の時文小説詞曲応酬代筆、已に刻せる者は皆な板を追いて之を焼く、士子場屋の文を選し及び私かに義策を試み、坊市を蠱惑する者は、弟子員は黜革し、見任官は落職し、致仕官は告身を奪う。」(注一)と、学はすべて経世に用あるべきを説き、之を犯す者には嚴罰を以て臨むべきである、と主張する。

このように、あらゆる無用無益なものに対する極端な憎悪は、文学の内容に於ける、遊戯的な要素を認めないばかりでなく、或る種の文、即ち右に挙げた、時文・小説・詞曲・応酬・代筆等には、一切執筆を拒絶するという態度を彼に要求した。

これらの中でも、彼の最も排撃したのは、文筆生活を營

む者にとって、常に大きな部分を占める、応酬の文字である。

施恭人六十序に云う。

「近日古文の道熄みぬ、而して応酬の免る能わざる所の者、大槩三有り、則ち皆な序なり、其の一は陞遷の賀序、其の一は時文の序、其の一は寿序、蓋し今の古文を為ると号する者、未だ序より多きは有らざるなり、序の多き亦た未だ寿序より多き者有らざるなり。」(注二)又、張母李夫人六十寿序に云う。

「応酬の文、文を知る者の為ざる所なり、頌禱の詞は此れ応酬の尤なる者なり、然れども震川の寿序に於ける、之を外集に置くと雖も、而も竟に廢する能わざる者は何ぞや。」(注三)

彼自身、未だ一篇の応酬の文を作らず、と断言するのであるが、ただ共学の友人に限り、交情を序し、學術を論ずる目的に於いてのみ、聊か筆を執つたと弁じている。(注四) 事実、彼の集中、寿序の占める割合は非常に小さく、全篇三百三十余に対して、僅かに十九、6%にも満たない、寿序に対して、或る見識を示した帰有光も、明末の大筆錢謙益も、共に百篇に近いことを想起すれば、彼の信念は、実践されたと認めてよいであらう。

寿序は、元來、ただ美辞をつらねて、人の長寿を祝するだけのものであるが、宗羲は、我が寿序は、今の応ずる所の徵啓文詞と類せず(注五)、と自ら高言する如く、所謂寿序とは、全く似て非なるものである。某母の寿序と称する

もの三篇も、その某母に関する記述は、最後に僅か数行を費すのみで、他の大部分には、熱烈に寿序の不可を言い、学と文とを論じているのである。

従つて、この主張に忠実であるためには、依頼される应酬文ばかりでなく、贈られるものをも拒絶することが、彼にとつて当然必要であらう。宗義が六十歳に達して、友人たちより祝されんとした時、愕然たるに勝えず、とつぶやきつつ、辭祝年(注六)という一文を草して、自らの志を示したのであった。

このように、宗義は、殆んど無批判に受け入れられてきた既成事実や、旧来の習俗に対して、頑強に自己の主張を貫こうと試みたのであるが、彼のこの態度は、それが文学の内容に向けられた際、明末清初にあつて、一つの新しい、しかも非常に重要な問題を提起する。

それは、事物に対する客観的な批判と、人間とその行為に対する価値判断を、誤つてはならない、ということである。

例えば、単に奇異な事象、或は奇矯な行為は、その奇異さ、奇矯さによつて、価値を与えられることは、絶対にないということである。論文管見に、

「作文は架子を倒却す可からず。」(注七)

の一条を挙げ、王世貞が、刻印章質の誌に、単なる職人を唐寅や文徵明と比較して論じているのを、非難している。

また、南雷集中に、張南垣と柳敬亭の二伝があるが、こ

れは、呉偉業の同名の伝を、自己の識見を以て書き換えたものである。

柳敬亭伝の跋に云う。

「偶たま梅村集中に張南垣、柳敬亭二伝を見る、張は其の芸にして道に合するを言い、柳は其の寧南の軍事に参ずるを言いて、之を魯仲連の排難解紛に比す、此等の処皆な軽重を失う、是れ文章家の架子を倒却するなり、余因つて二伝を改む、其の人本と瑣瑣として道うに足らず、後生をして文章の体式を知らしめんのみ。」(注八)

宗義も偉業も、同じく復社に属していたが、偉業が、王世貞を生んだ太倉の出身で、陳子竜等、七子の流れをくむ人たちに繋がっていたのに対し、宗義は、錢謙益、艾南英一派の主張に共鳴していた關係上、文学に対する見解の相違は、避け難いとしても、当時、江左に錢呉と併称されていた詩文の大家を、いささかの侮蔑と共に、論駁しているのである。

錢謙益が病床にあつた時、依頼文の代草を、二三の人に托したが、みな意に滿たなかつたところ、宗義の文を得て忽ち大いに喜んだ、ということや、若年の頃、文震孟に、後日古文を以て、一世に鳴るであろうと嗟賞されたことなどが、思旧録に見えるが、これは決して自讃ではない。古作家としての黄宗義は、今少し、注目と評価を与えられてもよいのではないかと思われる。

つまらぬ事柄を、興味あるフィクションに作り上げることは、文学の常套手段であり、且つそうすることによつて、

奔放な空想、或は華美な幻想の世界へと我々を導き、文学自体も、豊かな可能性を常に保ち得るのであるが、宗羲はこのような飛躍を一切認めなかった、大部な彼の集中に録された事実と人間は、悉く正当な理由によって、その存在の価値を要求し得るものに限られている。

あらゆるものが、単なる特殊性や偶然性によって、価値づけられることはない、庭師の技術が、講釈師の行為が、その特殊性や偶然性によって評価されるのは誤りであると彼は断言する。

他人の文についてと同様、自己の作についても厳格であらねばならぬ、と考えた宗羲は、清朝の忌諱を避ける目的以外にも、屢しば改定の筆を費していることは、例えば、明文案自序を二篇草し、劉宗周の同門の弟子であった、著明な理学者、陳確（乾初）の墓誌に於いて、実に四度までも稿を改めているのである。これは、宗羲が、陳確の死後、その遺著を精読するにつれて、その都度、故人に対する自己の評価を変えていった事を示しているので、哲学上では宗羲の思想の変遷を知る、興味ある手掛りであるが、それとはにかく、彼が自己の思想に忠実であり、且つその表現にも心力を砕いたことは、この一例によっても知り得るであらう。

注一 明夷待訪録 学校

注二 南雷文案外卷 施恭人六十寿序

注三 南雷文案外卷 張母李夫人六十寿序

注四 同右

注五 同右

注六 南雷文案卷三 辭祝年書

注七 南雷文定卷三 論文管見

注八 南雷文定卷十 柳敬亭伝

四

亭林の經学、梨洲の史学と併称されているように、黄宗羲は、その該博な学問の中でも、史学の分野に於いて、貢獻するところが非常に大きかった。

彼の主著の一つである明儒学案は、完整な分類と精緻な論拠とを有する、明代哲学史であり、行朝録、汰存録、海外勸哭記等にも、彼の史学者としての見識を示した部分は頗る多い。

父尊素が逮捕される時、「史事を通知せざる可からず」と宗羲を戒めた事は、全祖望の梨洲先生神道碑文（注一）に見えるが、その後遺訓に遵った彼は、二十一史、明十三朝実録より、稗史野乘に至るまで熟読し、古今の史実に精通したといわれる。

彼の歴史に対する知識は、博大であるばかりでなく、卓見に富み、極めて実証的で、厳密な方法論に基いたものであることは、周知の事実であるが、これらの特質が、彼の文集の諸作に、どのように影響し、どのような結果を齎しているかに就いても、併せて考察されなければならないであらう。

万曆以後、国家の多事を反映して、さまざまの立場から

夥しい数の野史が著されたが、その内容に至っては、真偽虚実を混淆して、史料価値の判断に困しむものも少くない。宗義は、これらに對して、一一確証を挙げ、注意深い帰納法によって、能う限り階級や党派の利害に拘わらない公正な判断と価値を与えようと企てた。

「桑海の交、紀事の書雜出す、或いは伝聞の誤り、或いは愛憎の口、多くは事実非ず。」(注二)

と述べ、これらの過誤を正すことが、後世に對する史家の責務である、と彼は考えた。幾社の領袖であり、殉難の忠臣として名高い、夏允彝の幸存録に就いて、

「彝仲の人品、將に千秋に存せんとす、並びに此の録を存すれば、則ち其の玷を為すこと大なり、之を不幸存録と謂うも可なり、晚進本末を知らず、向背に迷う、余故に其の一二を摘して之を弁ず、彝仲を愛する所以のみ。」

(注三)

と云う如く、当時の人士の間に於いて、是非を顛倒した議論の多いことを憂えて、彼は、これを警告する言葉を、文集の処々に記している。

松槃姜公墓誌銘に、銘を乞うた姜思簡に与うる書が附されているが、それには、事実の誤りや、年代の食いちがい、を、一一史実に照らして訂正したのちに、

「凡そ碑板の文、最も真実を重んず、而して無識の者、昧然として之を為す、此れ弇州が二史攷の、其の糾繆に勝えざる所以なり。」(注四)

と俗史の信憑性の乏しいことを指摘しており、且つその前

文に於いて、曲げられた事実や、誇大な形容は、全て之を抹却することを、墓誌の依頼者に厳しく宣言している。

南雷集中の伝状及び碑誌類に於いて、彼は、その人自身の行為、若しくはメリットを誌すのみならず、それに関連ある史的事実を裏付けすることによって、より一そう、その人物像をヴィヴィッドに浮彫させ、その果した役割の程度や、歴史的意義を、自然に読者に印象づけようと試みている。例えば、劉宗周、章正宸、徐石麒、熊汝霖、錢爾樂、張煌言等の行状墓誌を読む者は、明末政界の葛藤や、南明諸政権の消長をほぼ理解し得よう。

それ故、宗義の文章の総ては、後世に遺すに値いする、と彼自身が判断した時にのみ書かれたのであった。当時の多くの文士がそうであったように、生活のために書かれたものは一篇もない、と彼は公言して憚らない。

又、瑣細な事実までも忠実に採録し、干支を正確に、且つ煩瑣なまでに記載して、史実が相い補捉し、相い参照するように工夫した跡が、文集中にさえも顕著に認められる。干支並びに年月を刻明に附すのは、彼の文章に特徴的であつて、陳齊莫伝(注五)には、それらを記すこと実に五十余、彼が記録の真实性に對して払った用意の、慎重周到であつたことは、この一例によつても明かであろう。又、宗義が、郷土の人物を顕彰するのに努力を傾注したことは、彼の著しい功績の一つに数えられる。

「桑海の交、士の慕義強仁なる者、一往して顧りみず、其の姓名の隠顯、以て後人の掇拾を俟つ、然れども泯滅

する者多し、此れ志士の痛む所なり。」(注六)

とあるように、武臣となるを肯せず国に殉じた忠臣、髻髮令に抗して殺された烈士、清朝の支配を逃れて身を全うした逸民等の事蹟を、及ぶ限り収録しようとした。事実、閩浙の人物中、彼の網羅に洩れた者は、殆んど認め得ぬであらう。

そのうえ、彼がその記録に留めた、人物並びに事蹟は、従来の正史に採られてきたような、朝廷と支配階級を中心としたものではなく、

「余叙事の文多し、嘗って姚牧庵、元明善の集を読む、宋元の興廢、史書の未だ詳らかにせざる者有り、此に於いて考見す可し、然れども牧庵、明善、皆な廊廟に在り、載する所戦功多し、余は草野の窮民にして、名公鉅卿の事は以って之を述ぶるを得ず、載する所亡国の大夫多し、地位の同じからざる耳、其の史氏の欠文に裨あるは一なり。」(注七)

と自ら述べる如く、同時代の事実と文献に、より多く注目することをその特徴とする。

最後にもう一つ付け加えたい、それは、宗義が、従来単なる文学作品としては見られていた詩文集を歴史の素材として高く評価しようとした点である。陸石溪先生文集序に言う。

「余の明文を選ぶ千家に近し、其の間多く実録と異同あり、蓋し実録は隱避する所有り、偏党する所有り、文集は是れ無き也、実録は止だ章奏起居注に拠って之を節略

す、一人一事の本末、詳かかにする能はざる也。」(注八)

史官による、或は史家による歴史のみが真実を伝えるとは限らない、多くの逆の場合が常に存在する時、この詩文集を利用するという方法は、非常に豊かな収獲を齎すであらうことは疑いない。宗義が、彼の文集を、明末清初の精細な史料として、期待していたことは、その叙述の態度より容易に推定されるであらう。

そして、黄宗羲のこのような史観は、明史の編纂を主幹した、弟子万斯同等によって、正史の中に反映されていることも附記せねばならない。

注一 鮎埼亭集卷十一、梨洲先生神道碑文

注二 南雷文約卷二、桐城方烈婦墓誌

注三 次存録題辭

注四 南雷余集 松榮姜公墓誌銘

注五 南雷余集 陳斎莫伝

注六 南雷文定四集卷三 都督裴君墓誌銘

注七 南雷文定前集 凡例四則

注八 南雷文定四集 陸石溪先生文集序

五

明の中葉以後、講学の風大いに開け、読書人階級のみならず、学問への情熱は、市民農民の間にも広く浸透して行った。

殊に陽明学の一側面である、実践を重んずる行動主義は、その啓蒙の対象を拡張することによって、その主旨を

広範囲に伝播させていった。

宗義は、明儒学案に於いて、

「農工商賈、之に従いて遊ぶ者千余、秋に農隙と成らば、則ち徒を聚めて講学す、一村既に畢れば、又た一村に之く、前歌後答、絃歌の歌、洋洋然たり。」(注二)

と、その盛況を写しているが、このような学問の一般化は他方、学問自体を、低俗化安易化させる弊害をも、必然的に伴った。陽明学の末流は多く禪に流れ、徒らに空理空論に耽つて、修身と読書思索に対する努力を放却してしまつたことは、我々のよく知るところである。

明末に至つて、このような風潮に対する批判と共に、イズムに拘束されぬ自由な立場より、学問を再構成しようとする動きが、漸く顕著になり始めた。東林と復社は、その標榜する所は異なるが、この動向の所産であることには間違いない。

最初は、名利に拘わらず、聖賢の学を修め、互に切磋して人格を高めあう、という目的で作られた多くの講社も、国力の衰退と共に現れてきた、さまざまな社会矛盾に、全く目を閉ぢたまま、自己の世界に没入していることは不可能であった。

講学というのは、元来、在野の自由な学問研究グループの活動を指す言葉であるが、それが、時代の要求に従つていつしか、科挙のための予備校的な役割りを果すものへと変質していったのである。

宗義が少時加わつた復社は、のち各地の結社を糾合し

て、江南の學術詩文の大勢力に發展したが、その盟主張溥は、

「世教の衰えて自り、士子経術に通ぜず、但た剽耳絵目、有司に弋獲さるるを幾幸す、明堂に登りて君を致す能わず、郡邑に長として民を沢するを知らず、人才日に下り、吏治日に偷る、皆な此に由る、溥、徳を度らず力を量らず、四方の多士と期して、共に古学を興復す、將に異日なる者をして務めて有用と為さしめんとす、因つて名づけて復社と曰う。」(注三)

と復社紀略に記されているように、明かに政治へ参加するための、実用の学を提唱しているのである。

科挙に登第するためになされる努力の大部分は、八股文を作るのに費された、と言つて差支えないが、この定式に規せられたスタイルに習熟するために、明の中葉以後、夥しい数の虎の巻が出版されたし、又著名な詩文社は、八股文の大家と称される人たちによつて結ばれているのが常であった。明末に於ける復社は、その最も規模の大きいものであった。

「東林は語録を以つてし、復社は八股を以つてす、其の之を文字に見わすは異なると雖も、其の講学を以つて政に干するに意有るは、則ち一なり。」(注三)

と、講学の内容が、復社にあっては、主として八股文であり、東林復社共に、学問が政治への手段となつていたことを、錢穆は右のように証言している。

結局、国情の不安が、知識人階級を、積極的に政治に参

加させる氣運を齎したにも拘らず、科擧の制度が、煩瑣な形式主義に災いされて、有為の人材を獲得するに適當な手段を見出し得ぬままの、矛盾した状態にあったのである。

この試験制度に対する批判は、当然のことではあるが、これに失敗した明の遺老たちによつて、最も痛烈になされた。

八股文、即ち時文に熟達することが、何よりも優先するという制約下にあつては、重厚な且つ根底ある、他日眞に国家に有用な學問の育成は、殆んど期待し得ない。

「今の時文を爲る者、其の速成を望まざるは無し、其れ肯て時日を載籍に枉費せんや。」(注四)

と、宗羲が歎息するような、學問の公式化、軽速化が、それに伴つて生じた。

この弊害が、具体的に、どのように現れたかについて、彼は詳説する。

「擧業盛んにして聖學亡ぶ、擧業の士、亦た其の聖學に非ざるを知るなり、第に仕宦の途たるを以て跡を寄すのみ。而して世の庸妄なる者、遂に其の成説を執り、以つて古今の學術を裁量す、一語の之と相い合わざる者有れば、愕眙し視て曰く、此れ離經なり、此れ背訓なりと、是に於いて六經の伝註、歴代の治乱、人物の蔽否、各おの一定の説有らざるは莫し、此の一定の説なる者は、皆な膚論譬言、未だ嘗つて深く其の故を求め、証を心に取るあらざるなり、其の書數卷にして尽すべし、其の學終朝にして畢るべし。」(注五)

明一代を通じて、思索的な、体系ある學問が発達しなかつ

た最大の原因は、彼が処処に指摘する如く、三百年間、人士の精力が尽く場屋、すなわち試験場に傾注された、という事実に求められる。彼の科擧に対する憎悪が、如何に深刻であつたかは、次に列擧する弾劾によつて知れよう。

「科擧の學盛んなる自り、世復た書有るを知らず。」

(注六)

「科擧の學盛んなる自り、史學遂に廢せり。」(注七)

「制科盛んにして、人才細けらる。」(注八)

「今日科擧の法、天下の人才を破壊する所以なり。」

(注九)

「科擧の學興りて自り、師道亡びぬ。」(注十)

このように、あらゆる文化の墮落の根源が、この制度悪に内在するものであると、彼は断ずるのであるが、しかし、隋以来、科擧は殆んど一貫して実施されてきたにも拘らず、何故明に至つて、殊に明末に於いて、その弊がかくも甚しくなつたのであろうか。

宗羲は、待訪録に、取士を論じて云う。

「古の士を取るや寬、其の士を用うるや嚴、今の士を取るや嚴、其の士を用うるや寬、…取るに嚴なれば、則ち豪傑の丘壑に老死する者多し、用うるに寬なれば、此れ位に在る者、多く其の人を得ざる也。」(注十二)

その病根を、嚴於取、寬於用の二事に要約したのち、又、

「唐宋は其の科目たるや一ならず、士此に与るを得ざれば、尚お転じて彼に従事すべし。」(注十二)

と、官吏となるのに、他の便法もあつたことを示して、明

代の進士一本の選別法と八股文の偏重を難じ、その匡正策について、各時代の利弊を参照して、次のように提案する。

「若し經義を罷めば、遂に恐らくは棄經不学の士有らん、而して先王の道、益ます視て迂闊無用の具と為さん、余謂えらく、當に墨義の古法を復すべしと、經義を為すものをして、注疏大全漢宋諸儒の説を全写せしめ、一前に条具し、而して後之に申ぬるに己の意を以てせしめば、亦た必ずしも一先生の言を墨守せざらん、前に由れば則ち空疎なる者細けられ、後に由れば則ち愚蔽なる者細けられん、亦た浮薄を變ずるの一術也。」(注十三)

艾南英に、応試文自叙という一文があり、七試七挫した自身の経験を、傷ましく書き綴った後に、

「挙業を棄てて事とせず、門を杜ぢて讀書し、古今の治乱興衰を考えて、以って自づからを世に見さんと欲するも、而も逸民と為って以って老を終うる能わざるを念う。」(注十四)

と、そのデレンマを敷いているが、当時の讀書人階級にとつては、科挙に合格することが、その目標のすべてであり、それ以外の生き方は、敗残者の或る暗い霧をもつものでしかなかつた、故に不遇の士は、一生この制度を呪詛しつつも、受験を放棄し得なかつたのであつた。

しかし、その生涯を、処士乃至は諸生で終つた人たちの中にも、傑出した多くの才能を見出し得ぬわけではない。江南に於いては、明の中葉以後、出仕せず、学問や文芸に自己を埋没させてしまふという、沈周らの伝統が根づよ

く存在していた、文徵明や陳繼儒は、野に在って声名一時を圧した人物である。しかし、これらの人々は、現状是認の上に立って、自己を自己の世界に閉ぢこめてしまつたのであつて、あらゆる外部矛盾を、積極的に打破しようとは試みなかつた。

また、志を得ないままに、江湖に流浪しているような人たちの多くは、徒らに大声放語して、世を非とするばかりで、彼等を窮迫せしめている、墮落や虚偽や腐敗を救正するための、プラスの力とはなり得なかつた。

宗羲は、明末人士の風氣の一つとして、「罵」を挙げた。

「昔の学者は道を学ぶ者なり、今の学者は罵を学ぶ者なり、氣節を矜る者は則ち罵りて標榜を為し、經世を志す者は則ち罵りて功利を為し、書を読み文を作る者は則ち罵りて玩物喪志を為す、心を政治に留むる者は則ち罵りを俗吏と為る。」(注十五)

このような否定的なエネルギーは、ただ混乱を増大し、不毛を助長するばかりで、建設的な行為にとつては、反つて有害でさえある、と彼は考へた。

宗羲が待訪録に誌した二十章の論策は、如何に改革すべきか、という結論を提示する過程に於いて、痛烈に現状を指弾し、且つ否定しているのであつて、前者の否定とは、質的に全く異つたものである。

宗羲は、革命の余波も漸く静まつた頃、同志を糾合し、その師劉宗周の遺志を継いで、越中に証人書院を起し、後進の誘掖に任じた。

「明の中葉以後より、講学の風已に極微と為る、性命を高談し、直ちに禅障に入り、書を束ねて覷ず、其の稍や平なる者は則ち学究と為るも、皆な無根の徒のみ、先生始めて謂う、学は必ず経術に源本し、而る後に誦虚を為さず、必ず史籍に証明し、而る後に以て務に応ずるに足る、元元本本、抛る可く依る可しと、此より前の講堂の錮疾、之が為に一変す。」(注十六)

と、全祖望がこの間の事情を要約しているが、彼の努力は、空疏虚妄の旧習を一洗して、博綜を務め、実証を尚ぶ新しい時代の学風を、浙東に開いたのであった。

しかし、講学に対する彼の態度は甚だ複雑である、壮年の頃、武林に、江浩、張岐然等と読書社を起し、共に勉学に励んだことは、快よい追憶として、屢しば彼の文中に現れる。

「予束髮出でて遊び、即ち嚴印持、聞子將と交わる、其の時、読書社は号して清流と為す、多く能く詩古文を為る者有り、桑海以来、此の風渺然たり。」(注十七)

これに反して、彼が姜希轍等と共に、先師劉宗周の遺志を継いで立てた証人書院については、言及すること極めて稀で、故意に語ることを避けているように感じられる。(注十八)

「今、夫の世の講学する者、訓故の習を墨守するに非ざれば、則ち性命の理を高談す。」(注十九)

これは、当時の講学が、ともすれば安易な方法による、低俗な学問に終始していた事実を難じたものであるが、より

具体的には、この講学という行為がそれ自体の中に伏している、教師の側に見られる卑屈固陋な職業意識、門生の側に認められる軽薄な功利主義を、彼は許容できなかったに違いない。講学に対して、彼は侮蔑よりも、憎悪に近い感情を抱いていたという証拠は、文集の処処に散見するのであるが、それにも拘らず、晩年になって、之に従事せざるを得なくなった事情については、

「余賦性偏弱、迫るに飢寒交故を以てす、遂に其の麋鹿の一往を得ず、屈曲して俗に従う、姑らくは且つ免れず。」(注二十)

と弁明している。又、

「其の後海上傾覆し、先生復た望み無し、乃ち太夫人を奉じて里門に返り、力を著述に畢す、而して四方業を請うの士漸く至る、已にして鄭に之き海寧に之く、巡撫張公以下、皆な開講を請う、先生已むを得ず之に応ず。」(注二十一)

とあるように、外部の情勢や、生活のため、已むを得なかった点もあるが、自己の抱負との矛盾に、彼は心中常に苦い反省を噛んでいたに相違ない。

宗義は、師劉宗周の慎独の哲理を反芻することに、その憂悩を加重させたであらう。

「当今の世、君子の為す可からざる者二有り、講学なり、詩章なり。」(注二十二)

という告白は、彼の体験が苦渋に満ちたものである故に、一そう切実な悔恨として受けとられるのである。

しかし、彼自身の、この気のすまぬ努力は、皮肉にもつゝの極めて特色ある学風を浙東に生む端緒となった。

一顧炎武、王夫之等が、彼らの偉大さを、ただ少数の友人たちと、その著書にのみ洩らしたままに、殆んど孤立して終ったのに反し、宗羲の講学の成果は、有力なエコールを浙東に形成し、後世に多大の影響を与えたのである。

「黄梨洲氏浙東より出で、顧氏と並峙すと雖も、上王劉を宗とし、下二万を開く、之を顧氏に較ぶれば、源遠く流長し。」(注二十三)

と、章学誠が浙西の学との比較に於いて論じているのは、この事実を簡明に述べたものであらう。

注一 明儒学案卷二十二、泰州学案、王東崖先生巽附

注二 復社紀略

注三 錢穆 中国近三百年學術史、商務印書館刊 p. 78

注四 南雷文案卷二、李杲堂文鈔序

注五 南雷文案卷一 惺仲昇文集序

注六 南雷文定卷一 伝是楼藏書記

注七 南雷文定卷四 補歴代史表序

注八 南雷文定後集卷三、陳夔猷墓誌銘

注九 南雷文定四集卷三 蔣万為墓誌銘

注十 南雷文定三集卷二 広師説

注十一 明夷待訪録 取士下

注十二 明夷待訪録 取士上

注十三 明夷待訪録 取士上

注十四 天慵子全集卷二 前歴試卷自叙

注十五 南雷文案卷十 七怪

注十六 結埼亭集外篇卷十六、甬上証人書院記

注十七 南雷文定五集卷一、趙漁玉詩鈔序

注十八 もっとも、証人書院設立の経緯については屢しば触れる。

例えば、南雷文定三卷集二、呉仲墓誌銘等

注十九 南雷文定四集卷三、西山許先生墓誌銘

注二十 南雷文案卷六、沢望黄君城誌

注二十一 国朝先正事略卷二十七

注二十二 南雷文宗三集卷一、天嶽禪師詩集序

注二十三 文史通義内篇二、浙東學術

六

宗羲の博識と能文を以てすれば、錢謙益を継ぐ大家として、従来の文学史に、或る位置を要求し得たであらう、と想像することは容易である。しかし、彼は、同時代の文士たちと同じ範疇に於いて、傑出した存在である、と認められることを欲しなかった。

経学は功名の手段に供せられ、詩文は応酬の具に墮して、これらが、人間を陶冶し、社会を秩序づけるといふ、本来の機能を失ってしまった時、明は亡んだ。

宗羲を始め、明の遺老たちが、社稷覆滅の原因を、エネルギーの誤った方向への注入に見出したとすれば、これを匡救せずに、自らをその中に感溺させておく、ということがあり得ようか。

詩文が、単なる自己表現の手段であり、慰藉や誇示や陶醉に、その目的を求めらば、それは、必然的に世紀末

の頽廢と紛擾へと転落してゆくであろう。宗羲はこれを確認し、そして証言した。

「文の天地の間に絶つ可からざる者、曰く、道を明かにするなり、政事を紀するなり、民隱を察するなり、人の善を道うを樂しむなり、此の若き者は天下に益あり、將來に益あり、多きこと一篇なれば、多きこと一篇の益なり、若し夫れ怪力乱神の事、無稽の言、勦襲の説、諛佞の文、此の若き者は已に損あり、人に益無し、多きこと一篇なれば、多きこと一篇の損なり。」(注一)

と、顧炎武も証言した。こうした証言が、遺老たちによって無数に重ねられた。そして、執拗な訊問と痛烈な糾弾の後に、所謂文学は姿を消してしまった。

文は以て道を載す、という意識を、常に脳裏に刻みながら、あらゆる文化事象を、正統的なシステムに嵌めこもうとする努力、これは、明朝三百年の太平に馴化された知識階級の生活態度、殊に王世貞によって代表されるような文

人生活を、峻拒することより始まる。そしてこれは、亡國の悲哀と、前後の混乱期の惨苦とを、身を以て経験した、清初の遺老たちによって、一種の抵抗意識と共に、頑強に推し進められていったのである。

しかし、彼等の道徳性を備えた、合理主義 実用主義に對する信仰を厳しく持ち続け、文学に於いても、その効用を極限まで追求していった時、文学は、そこに予想されている華やかさを失って、影の部分に追いやられ、代って、冷たく鍛ったさまざまの学問が登場してきたのである。

清朝の詩文は、このような顧・黄の主張を継がず、考証学とは全く異った土壌に育った神韻説によって、ためらい勝ちなその花を開いていったのであった。そしてそれらが結局は、錢謙益の議論を媒介として展開してゆくことは、次の機会に述べよう。

注一 日知録卷十九、文須有益於天下。